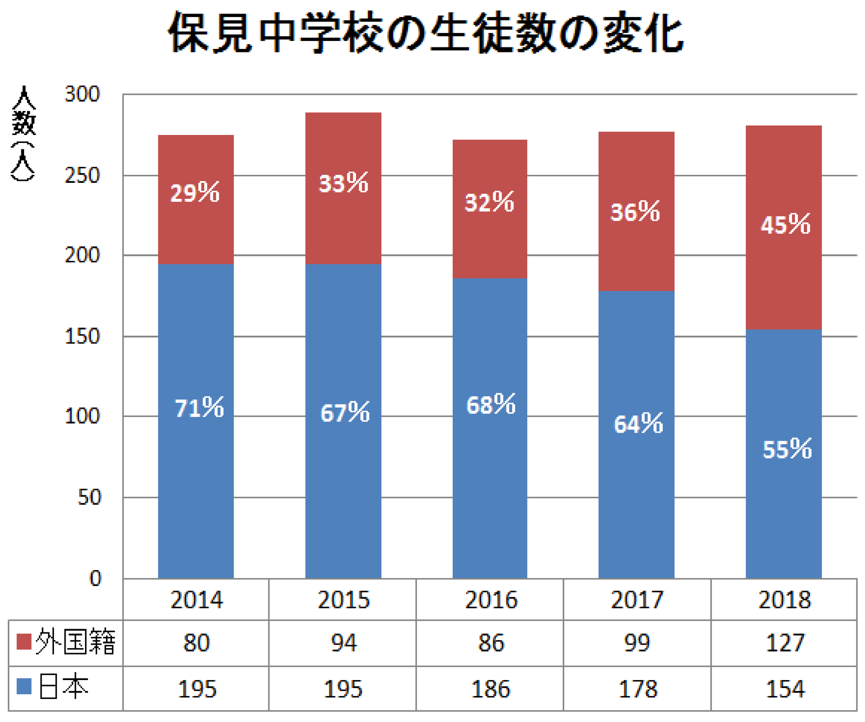
DLA＜読む＞短縮版を活用した生徒の現状把握と支援体制の構築
―外国人生徒の教科学習言語能力の向上を目指して―

篠原 啓史・松本 友美・平吹 洋子（愛知県豊田市立保見中学校）
櫻井 千穂（同志社大学）

実践の場の特徴

愛知県豊田市立保見中学校
〇全校281名【**内127名《45.2%》が外国人生徒**】の小規模校）
〇南米出身者の居住率が高い保見団地を学区にもつ
〇滞日期間の浅い生徒への日本語初期指導の実施と教科の少人数指導
・日本語指導のための加配教員
・ポルトガル語ができる日本語指導員の配置
・豊田市教育委員会「ことばの教室（日本語初期指導）」

☆近年、滞日期間の長い外国人生徒の学習でのつまずきが顕著
→教科学習言語能力の向上を目指した学校全体での取り組みへ



	2014	2015	2016	2017	2018
外国籍	80	94	86	99	127
日本	195	195	186	178	154

短縮版読むDLA」の実施風景

実践の目標

DLA＜読む＞短縮版で教科学習言語能力の基盤となる「読書力」を探り、
生徒の能力に応じた支援体制の構築を目指す。

実践の内容とその過程

校内研修（グループディスカッション）

《全職員への広がり》　《現状把握と支援体制の構築》

6月
・多言語の生徒が宿題をできない。
・授業でもわかっているのかどうか･･･

・多言語生徒の学習をもっとサポートしたい！
（！授業カリキュラムの詰まり）時間がない、
でもこのままでは・・・

7月
・多言語生徒の授業理解・・・どうしたらいいんだ？？

・外部の学識経験者と協力し、DLA〈読む〉短縮版の作成開始。

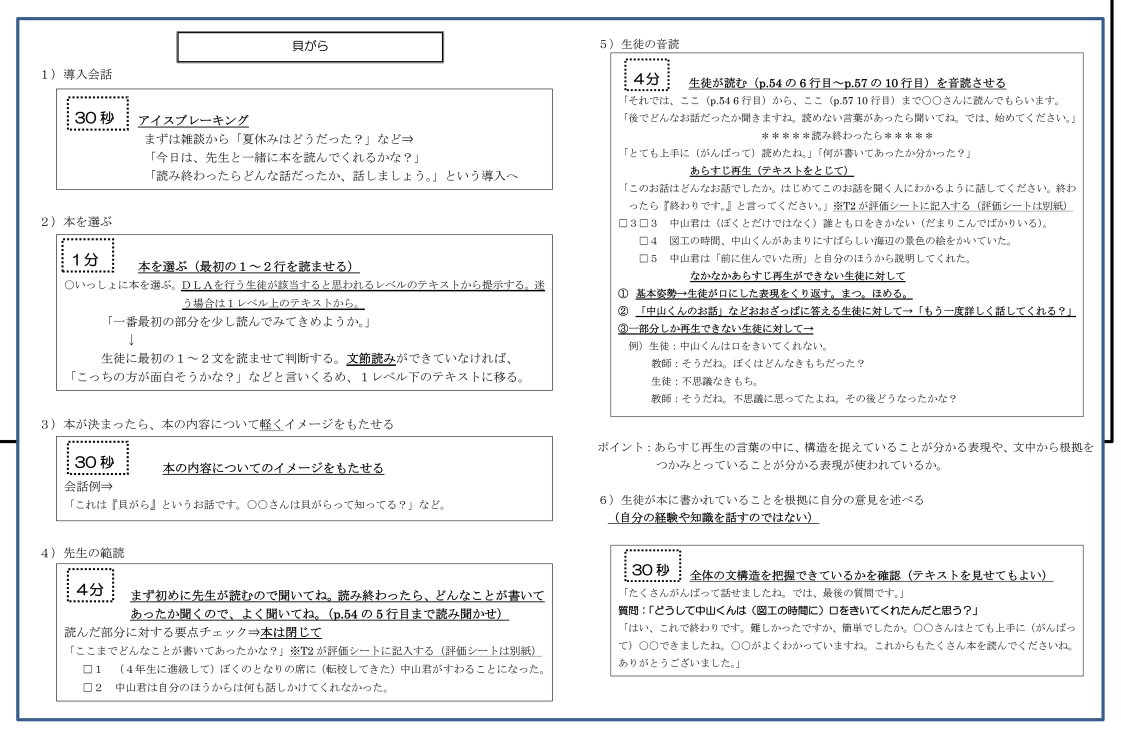
8月
・学識経験者による校内研修
「文化言語の多様な子どもの支援」
①講話②グループディスカッション③発表

・テキスト中の生徒の能力を判断できる部分を抜粋
１５分で行える「 DLA〈読む〉短縮版」の作成
・教師のDLA実施訓練実施。

9月
・後期の時間割を教科学習能力向上に向けて改善
・今後の活動についての理解を求める。
「日本語教育授業→保見中版ユニバーサル授業　」へ

「 DLA〈読む〉短縮版」の実施。
※１学年外国人生徒（３８名）対象
※教育相談期間に１時間×３日間、４チームで実施）
・チェックシートと録画映像を元に、５レベルにグルーピング。

【　ＤＬＡ〈読む〉短縮版の流れ　】
Ｔ１　生徒対応　Ｔ２　記録（ないでも可）
ポイント　音読：生徒がテスト感や強制感のない雰囲気づくり
　　　　　あらすじ再生：基本姿勢　繰り返す、待つ、褒める
1　**アイスブレーキング〈３０秒〉**
→テスト感や強制感のない雰囲気づくり
2　**本選び〈１分〉**
→生徒と共に書き出しや挿絵、題名などから
3　**イメージづくり〈３０秒〉**
→本の内容に入りやすいように
4　**教師の範読〈４分〉**
→初め～２ページほど、内容の区切りまで
あらすじ再生：どんなことが書いてあったかな。
5　**生徒の音読〈４分〉**
→読めない語句は助けてＯＫ
あらすじ再生：どんな話ですか？初めて聞く人にわかるように話してくれるかな。
6　**展開の予測や感想（３０秒）　※この時間設定で実質１５分**


貝がら
1）導入会話
30秒　アイスブレーキング
まずは雑談から「夏休みはどうだった？」など⇒
「今日は、先生と一緒に本を読んでくれるかな？」
「読み終わったらどんな話だったか、話しましょう。」という導入へ
2）本を選ぶ
1分　本を選ぶ（最初の1～2行を読ませる）
〇いっしょに本を選ぶ。DLAを行う生徒が該当すると思われるレベルのテキストから提示する。迷う場合は1レベル上のテキストから。
「一番最初の部分を少し読んでみてきめようか。」
↓
生徒に最初の1～2文を読ませて判断する。文節読みができていなければ、「こっちの方が面白そうかな？」などと言いくるめ、1レベル下のテキストに移る。
3）本が決まったら、本の内容について軽くイメージをもたせる
30秒　本の内容についてのイメージをもたせる
会話例⇒
「これは『貝がら』というお話です。〇〇さんは貝がらって知ってる？」など。
4）先生の範読
4分　まず初めに先生が読むので聞いてね。読み終わったら、どんなことが書いてあったか聞くので、よく聞いてね。（p.54の5行目まで読み聞かせ）
読んだ部分に対する要点チェック⇒本は閉じて
「ここまでどんなことが書いてあったかな？」※T2が評価シートに記入する（評価シートは別紙）
□1　（4年生に進級して）ぼくのとなりの席に（転校してきた）中山君がすわることになった。
□2　中山君は自分のほうからは何も話しかけてくれなかった。
5）生徒の音読
4分　生徒が読む（p.54の6行目～p.57の10行目）を音読させる
「それでは、ここ（p.54 6行目）から、ここ（p.57 10行目）まで〇〇さんに読んでもらいます。」
「後でどんなお話だったか聞きますね。読めない言葉があったら聞いてね。では、始めてください。」
*****読み終わったら*****
「とても上手に（がんばって）読めたね。」「何が書いてあったか分かったか？」
あらすじ再生（テキストをとじて）
「このお話はどんなお話でしたか。はじめてこのお話を聞く人にわかるように話してください。終わったら『終わりです。』と言ってください。」※T2が評価シートに記入する（評価シートは別紙）
□3　中山君は（ぼくとだけではなく）誰とも口をきかない（だまりこんでばかりいる）。
□4　図工の時間、中山くんがあまりにすばらしい海辺の景色の絵をかいていた。
□5　中山君は「前に住んでいた所」と自分のほうから説明してくれた。
なかなかあらすじ再生ができない生徒に対して
①　基本姿勢→生徒が口にした表現をくり返す。まつ。ほめる。
②　「中山くんのお話」などおおざっぱに答える生徒に対して→「もう一度詳しく話してくれる？」
③一部分しか再生できない生徒に対して→
例）生徒：中山くんは口をきいてくれない。
教師：そうだね。ぼくはどんなきもちだった？
生徒：不思議なきもち。
教師：そうだね。不思議に思ってたよね。その後どうなったかな？
ポイント：あらすじ再生の言葉の中に、構造を捉えていることが分かる表現や、文中から根拠をつかみとっていることが分かる表現が使われているか。
6）生徒が本に書かれていることを根拠に自分の意見を述べる（自分の経験や知識を話すのではない）
30秒　全体の文構造を把握できているかを確認（テキストを見せてもよい）
「たくさんがんばって話せましたね。では、最後の質問です。」
質問：「どうして中山くんは（図工の時間に）口をきいてくれたんだと思う？」
「はい、これで終わりです。難しかったですか、簡単でしたか。〇〇さんはとても上手に（がんばって）〇〇できましたね。〇〇がよくわかっていますね。これからもたくさん本を読んでくださいね。ありがとうございました。」

【　DLA〈読む〉短縮版の実施から　】
1　実態を数値で全職員に伝えることができる。
2　滞日期間の短い生徒はステージ１、２、長い生徒でもステージ３に集中。
(これらの生徒の指導法を意識的に変える必要がある。)
3　話す、読むの力のギャップを掴む
4　対話を通して、本の趣向や母語での読書量を確認。
5　生徒にどの本をすすめるかを決める基準ができる。
6　授業、宿題での語句や文章の理解度を考えた学習指導。

	ステージ５	ステージ４	ステージ３	ステージ２	ステージ１
本	自然を守る	アニメーションとわたし	貝がら	花いっぱいになあれ　など	ことりと木のは　など
レベル	小学校高学年～中１		小学校中学年	小学校低学年	
滞日年数８～１３年	6	5	12	2	－
４～７年	－	－	3	－	5
～３年	－	1	－	1	3
計	6	6	15	3	8

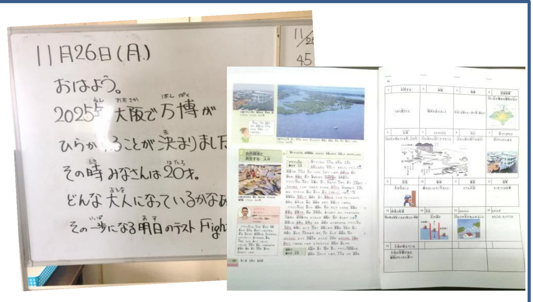
10月
・各教科部がそれぞれの授業のユニバーサル化を目指して教材等の工夫を開始

・後期の時間割と日本語指導教員の配置の変更

DLA〈読む〉短縮版の結果に基づいた実践

保見中版ユニバーサル授業の実践（授業の工夫で学習を助ける）

【　全学年　全教科　】
〇視覚化　板書、学習プリントへのルビ打ち
　デジタル黒板を使った情報の可視化
　国語科以外の教科のルビ入り教科書
〇共有化　ペア、グループ学習の工夫
〇焦点化　発問などの授業内で使う言葉の選択



学年掲示板のルビ＆ルビ付教科書

【　教科ごとのユニバーサル授業の実践　】
〇国語科：リライト教科書の活用、少人数指導のワークシート改善（焦点化）
〇社会科：授業時間・展開の構造化で見通しをもった学習（焦点化）
　１年→授業開始１０分を本時の学習の知識を身につける時間に。
　２年→週１/3回の取出し授業で、日本語と母語で授業内容を先行。
〇数学科：単元初めに使う語句の意味の確認。（焦点化）
　母語を意識したグループ分け活動（共有化）
〇理科　：実験、体験を重視した授業展開（視覚化）
　社会科２年同様の先行型取出し授業の実施（焦点化）
〇英語科：日本語に頼らない資料や疑似体験を生かしたオールイングリッシュ授業（視覚化）

技能教科：それぞれの教科で活動や作業を重視した視覚化、焦点化を意識した授業を行なっている。

※今後、多言語生徒と日本語生徒のかかわりから学習が深まるような共有化の工夫を模索している。

ポケトークで取出し授業

読書プログラムの実践（読書力を高める）

本との出会い

掲示づくりの様子

【　初期準備　】
〇後期授業時間割の修正
→教務主任、国語科と相談、１年国語少人数授業、週１/４で活動
〇活動場所の確保
★ステージごとの読書力に対応できる本の確保
→図書館司書と協力、日本語、母語の本を手に入れる
　中央図書館に借りる、ブラジル総領事館、
　保護者や地域への呼びかけ

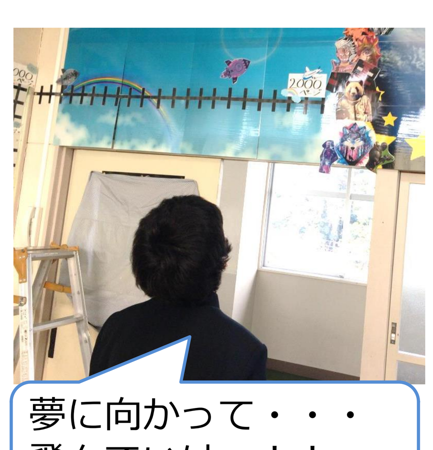
【　活　動　】
〇意識付け（　多言語＝２つの力で未来に飛ぶロケット　）
→ページ数を大切に、日本語と母語の本の読書目標を
→教室掲示の工夫で自分の成果を確認できる
〇本を手に取ろう（いつでも借りられる環境）
→①自由②チャレンジ（★ステージに合う日本語読みもの提示）
〇記録しよう
（１）読んだ本リスト作成
（２）あらすじ記録　作文用紙　→　罫線へ
★ステージに合わせた声かけで書く内容のレベルアップ
・書くステップ　時系列→関係性の把握→全体・要旨の把握
　→テキストに対する評価
・書く内容を自他で確かめる。
　教師と会話でことばを引き出す、自分の記録を読んで修正
　ペアで伝え合いなど

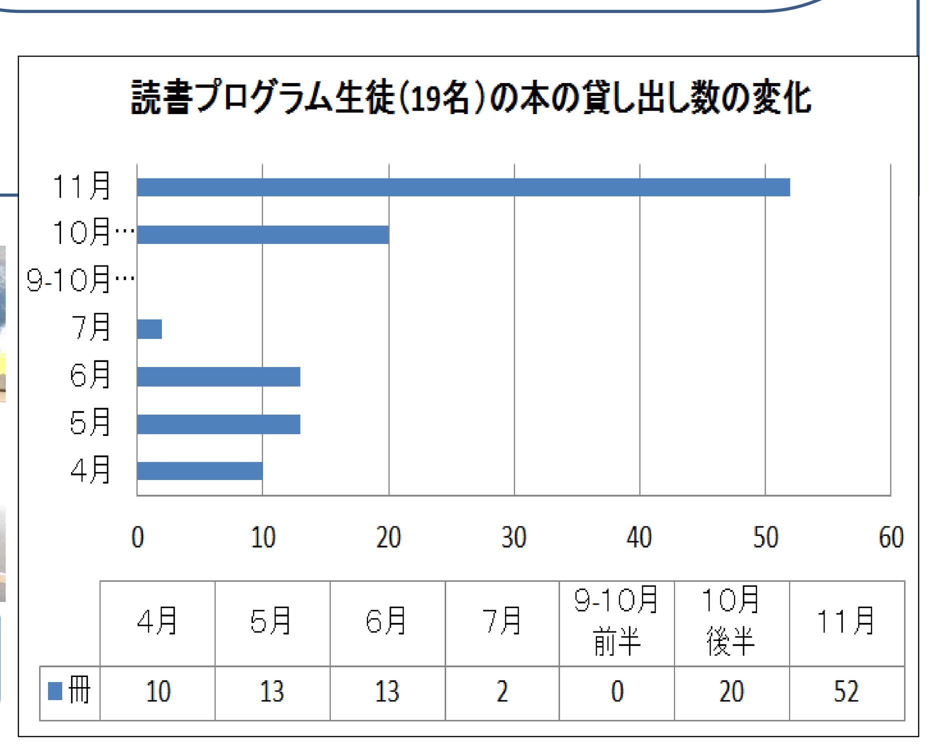
♡生徒と共につくる♡
①生徒の意欲を高めるため、「君たちが保見中の未来をつくる」ことを生徒に話す。読書量を持続するため、目標を設定する時間に。
教師：冬休みまでの日本語とポルトガル語の本の目標冊数を決めよう。
生徒：先生、ページ数を目標にした方がいい。ページ数の方が、どんどん増えてく、本の大きさ(ページ数)も違うから。
→他生徒も賛成し、ページ数を目標にすることに。

②生徒同士が影響し合い、高まる。
生徒：A君の読書リスト（に記載）のO GAROTO DO SONHOどこ？私も読みたい。
生徒：これ、家で読んでた本、良い本だから、(他生徒が読めるように)学校に置いていいよ。
→生徒同士の本の交流が始まる。

成果と今後の課題

【　成果　】前述の【 DLA〈読む〉短縮版の実施から】で述べたように、今回の実践を行なったことで生徒の実態をより視覚的に掴み、その後の保見中版ユニバーサル授業の実践に生かすことができた。特に多言語の生徒にもわかる授業＝日本人を含むすべての生徒にもわかる授業であるという意識を教師がもてたことは大きいと考える。生徒の変化を見ながら、今後も工夫を続け、成果を記録していきたい。
読書プログラムでの成果は、まだ授業の中では確認できていない。しかし右のグラフにあるように、多言語生徒の読書量が飛躍的にあがったことは、１つの成果であると考える。
【　課題　】今後も【 DLA〈読む〉短縮版を用い、記録の蓄積を行ない、より本校の実情にあった読書プログラム、保見中版ユニバーサル授業を模索していきたい。また母語の力を伸す手立てや多言語を生かしたグループ活動など、日本語に偏らず、多言語、多文化の生徒がいる特色を生かした学校づくりをしていく必要があると考える。


夢に向かって・・・
飛んでいけー！！



	4月	5月	6月	7月	9-10月前半	10月後半	11月
冊	10	13	13	2	0	20	52

【引用文献】文部科学省(2014)『外国人児童生徒のためのJSL対話型アセスメントDLA』